

来週の「売り物」、記事はこれ



2016年4月1日号

毎日新聞東京本社 編集局・販促宣伝部

商業広告解禁 中国市場に懸けた男たち

3日(日)



1970年代末、商業広告が解禁された中国へ、日本の広告代理店は世界に先駆けて進出しました。その一人が旧満州に生まれ、20代まで中国で過ごした電通の初代北京事務所長、八木信人さん(72)。最大のライバルとなったのが、文京区で社員十数人の小さな代理店を率いる韓慶愈さん(90)でした。満州国政府の派遣留



学生として日本へ渡り、戦後は故郷が消滅した在日華僑です。八木さんは81年に日本の音楽グループ初となるアリスの中国単独公演を成功させ、その半年前、韓さんは中国で日本のテレビアニメ初となる「鉄腕アトム」の放映を実現し、子供たちを夢中にさせました。日本製品が世界を席巻していた時代。歴史に翻弄されながらも、中国の広告市場を舞台に火花を散らした男たちの数奇な人生です。

日曜朝は『S』で始まる——。ストーリーにご期待下さい。

「政治とカネ」問われた甘利明衆院議員

このまま「説明責任」を果たさないのか?

夕刊2面特集ワイド 4日(月)



「政治とカネ」の問題で、甘利明衆院議員＝写真＝が経済再生担当相を辞任して2カ月。いまだに疑惑についての追加説明はありません。「睡眠障害」で療養中としていますが、辞任の記者会見では「調査を進め、しかるべきタイミングで公表する」と語ったのではなかったか。このまま国会閉会を迎えれば、「逃げ得」の批判さえ出かねません。国会議員の「重責」を果たすとはどういうことなのか、考えました。

第74期名人戦開幕 5日(火)

第74期名人戦が5日、東京都文京区のホテル椿山荘東京で開幕します。防衛で10期となる羽生善治名人(45)＝写真右＝に挑むのは、新鋭の佐藤天彦八段(28)＝同左。佐藤八段はA級1期目、8勝1敗の新記録で挑戦権を獲得しました。20代の挑戦者は、16年ぶりです。受ける羽生名人は、通算タイトル獲得94期と歴代1位の記録を持ち、将棋界の頂点に君臨しています。若き挑戦者が世代交代の到来を告げるのか、ベテランが貫禄を示すのか。目が離せません。



「Tokiko's Kiss」

おんなのしんぶん  4日(月)



月1回掲載の加藤登紀子さんの対談コーナー。今回は、女性報道写真家の草分け的存在である笹本恒子さんです。戦前から活動を始め、101歳になった今も、次回作に精力的に取り組んでいる笹本さんに、加藤さんも大いに刺激を受けたようです。会話もとても弾んでいました。また、今回から連載開始以来続いていたレイアウトを一新。記事の分量を増やしたほか、対談後に加藤さんが感想をつづるコーナー「お会いして」も始まりました。ぜひご一読ください。

食・作りおきおかず

くらしナビ面 5日(火)

野菜や肉にほんの少し手を加え保存しておくだけで、あわただしい朝食、疲れて帰った時の晩ご飯も簡単に作ることができます。心と時間に余裕が生まれる「作りおき」は、忙しい人に特におすすめです。2、3品の作りおきが常にあると、献立を考えるのも楽になります。料理研究家で国際中医薬膳師の資格をもつ石澤清美さんにポイントを教えてもらいました。



話題の水素水を知る

くらしナビ面 9日(土)



水素水が流行しています。水素ガスを水に溶かしたもので、体に悪い活性酸素を減らす作用があり、病気の治療にも使われています。水が効くのではなく、水素が効く点がポイント。ただ、水素がどの程度含まれているか分からない製品もあり、戸惑いも広がっています。水素水をめぐる状況を報告します。

全国高校選抜ラグビー大会開催

準決勝：6日(水) 決勝 7日(木)

3月30日に開幕した「第17回全国高校選抜ラグビー大会」(日本ラグビー協会主催、毎日新聞社など後援)は6日に準決勝、7日に決勝が行われます。会場は2019年ラグビー・ワールドカップ会場の埼玉・熊谷ラグビー場。全国の強豪32チームが8組に分かれて予選リーグを戦い、各組1位が4月4日からの決勝トーナメントに進出します。前回優勝の東海大仰星(大阪)は茗溪学園(茨城)などと同じE組、15年度の全国高校ラグビー大会を制した桐蔭学園(神奈川)は御所実(奈良)などと同じC組。高校ラグビー新シーズンの幕開けとなる今大会で頂点を勝ち取るのはどの高校か? また5日には「第5回全国高校選抜女子セブンズ大会」(同)も同会場で開催。大会4連覇を目指す石見智翠館高(島根)など12チームが女子の頂点を競います。



没後20年 司馬遼太郎からの「伝言」

オピニオン面 [論点] 8日(木)



国民的作家とうたわれる司馬遼太郎(1923~96年) = 写真。亡くなって20年という節目の年を迎えて、テレビ、雑誌などでは回顧特集が続いています。司馬はおびただしい数の歴史小説、エッセーを残しました。発表当時、歴史上の若き群像に当てた光は、一方で同時代の影を映し出したとも評されました。そして、その作品群はいまだ私たちの胸に何ごとかを問いかけているようです。哲学者の梅原猛さん、俳優の東出昌大さんらに、司馬作品の今日的意味などについて聞きました。

時代が見える——。オピニオン面にご期待ください。

子供の頃の自分へ

朝刊文化面 9日(土)

古典の本格派として現代落語界を牽引する気鋭の一人、柳家三三(やなぎ・や・さん・ざ)さんが「創作の原点」に登場します。三三さんは7月から「嶋衛沖白波(しま・ちどり・おきつ・しら・なみ)」を全編口演します。三遊亭円朝と同時代に活躍した談洲楼燕枝(だん・しゅう・ろう・えん・し)の長編噺(ばなし)。2011年に復活させた演目ですが、「無理に伝統を受け継がなければというつもりはない」と言う三三さん。「落語が好きで、夢中で聴いていた子供の頃の自分が楽しいと思える落語がしたい」

